

## 天海の素性

<参考文献1>

【令和初】大河ドラマ「明智光秀」について

本能寺の変については、明智光秀の背後にいる黒幕は誰か、というのが歴史好きの関心と呼ぶところですね。落合莞爾氏によって、それはもう回答が明かされています。

明智光秀の背後にいたのは皇室で、その皇室の中でも伏見宮です。

明智光秀と天海が同一人物という説がありますが、違います。

明智光秀の方が16歳か年上です。

天海の素性は、伏見宮から極秘に丹波の郷土安藤家に入った邦茂王（安藤惟実）の息子が天海で、安藤惟実の後裔が水戸藩に仕えた安藤為実と為章です。

明智光秀は、土岐氏支流明智氏の出身ですが、宗家の土岐氏は源氏を称しながらも源氏ではありません。源氏に入ったウバイド系の氏族です。

同じような氏族に小笠原氏と三好氏があります。

[『日本教育一考（+日本人の知らない真実を発掘）』2019-04-08](#) より

<参考文献2>

【落合シリーズより】天海の素性と関ヶ原の戦いの真相

『天皇とワンワールド』より。

-----

P 46（★代数の話がされているのは永世親王家伏見宮のことです）

七代邦輔の第六王子が天台座主尊朝入道親王となり、また邦輔の庶王子邦茂王が丹波桑田郡千歳郷小口村の郷土安藤家の養子として安藤維翁惟実を称します。

巷間で素性不明とされる天海は、天皇だけが所持される「ホンモノの皇統譜」によれば、安藤惟実の子で尊朝法親王の甥に当たり、生年は尊朝と同じく天文二十一（一五五二）年です。

つまり、巷説の天文五（一五三六）年より十六歳も若く、示寂は寛永二十（一六四三）年ですから、享年九十二です。

P47

折しも伏見殿邦房親王は、兄の天台座主尊朝法親王の病気が重く、余命いくばくもないのを知ると、叔父天海を兄尊朝と偽って徳川家康に引き合わせ、以後は尊朝の指導に従うように家康に命じます。

P52

伏見殿邦房親王引き合わせにより家康の指導者となった天海は、家康に命じて慶長五（一六〇〇）年に「関ヶ原の戦い」を仕掛けさせます。

この戦いの真の目的は、イエズス会に誑かされた西国大名を一神教から解放するためで、ようするに宗教戦争です。

「関ヶ原の戦い」に勝利した家康に命じて江戸幕府を開かせた天海は、慶長十四（一六〇九）年に水戸徳川家を建てて江戸定府とし、実際の幕政運営機関とします。つまり、水戸徳川家がウラの江戸幕閣だったので

す。

楠木正儀の末裔の摂津池田氏で寛永五（一六二八）年に生まれた光圀を、寛永九（一六三二）年に徳川頼房の世子に入れたのは、そのためです。

-----

これを初めて読んだ時は、血流が逆流して胸が躍ったことを今でも覚えています。  
常識と信じて疑わない学校で教える歴史は何なんだと思いたくなるのではないのでしょうか。

落合氏の國體ワンワールド史観に馴染みがないと、上記の記述は胡散臭い、なんでそんなことをと思われても仕方ないと思います。

しかし、これが歴史の裏側かも、とまずは虚心坦懐に読み出すと一般的に知られている歴史に感じていた不自然が氷解していくこともあると思います。

氏の本は、こういう度肝を抜かれる歴史のリーク情報が散りばめられています。

水戸家には、安藤惟実の後裔が仕えますが、それも上記の話を知っていると自然の流れだったのだ、ということがわかってきます。

[『落合史観研究会』2018-03-15](#) より